

本を選ぶ

NO.409 2019年(令和1年)6月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん>こんぴらさん 続
- 紙魚の繰り言 第24回
- 彩り・・・ダウン症・・・
- 帰ってきた図書館員(57)
- 図書館を離れて(第43回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

こんぴらさん 続

手が届きそうなほど客席から近い舞台や花道。役者たちの息遣いまでもが感じられるようだ。芝居の臨場感と興奮——。これが歌舞伎の原点なのだった。江戸時代さながらの「金丸座」芝居見物の実感である。

香川県琴平町の芝居小屋「金丸座」はかつて、国の重要文化財としてひっそりと保存された文化遺産であった。昭和59年、テレビ番組の収録で人気歌舞伎役者の中村吉右衛門、澤村藤十郎、十八世中村勘三郎(当時は勘九郎)が訪れた際、江戸の風情を残した素晴らしい芝居小屋に感激。この小屋で芝居がしたい、という情熱が町や興行会社などを動かした。地元の協力も得て、翌年から「こんぴら歌舞伎大芝居」が実現。生きた芝居小屋として復活したのだ。それ以来、今年で35回を数える人気公演となった「こんぴら歌舞伎」により、町も活性化し、新たな歌舞伎ファンを増やすことにもつながっている。

「こんぴら歌舞伎」創設に関わったひとりである勘三郎は平成12(2000)年、東京・浅草に長年の夢であった劇場を作り、歌舞伎公演を行った。江戸時代の芝居小屋を再現した移動式仮設劇場「平成中村座」の誕生である。その後ニューヨークなど海外での公演も実現させ、現在に至るまで全国各

地で公演を行い、人々を熱狂させ続けている。

“平成中村座を考えたとき、勘九郎の頭の中には、唐十郎の赤テントのことや、四国にある金丸座での経験があったに違いない。古い小屋で歌舞伎を上演し、新たな空間を作り出す。その発想がもとになって…平成中村座という形で結実していく”という記述が『中村勘三郎物語』(生島淳 構成・塚田圭一 監修/扶桑社/2013年)の中にみられる。

勘三郎は「平成中村座」という劇場を通じて、金丸座での芝居見物のような、客席と舞台とが一体となる“歌舞伎の楽しさの原点”を求めているのではないだろうか。

金丸座では、観客のストレートに笑ったり驚いたりする反応や、食い入るように舞台を見つめ、五感で感じ取ろうとしている姿が印象的であった。役者もまた観客に呼応する。その濃密な空間は、例えば東京・歌舞伎座のような大きな劇場とはまた違った緊迫感があった。頭で考える前に、目の前の役者の声に耳を澄ませ、一挙手一投足を見逃すまいと、その時間と空間を楽しむ。そんな熱を帯びた体感を得られるのが「金丸座」の素晴らしい点であり、それこそが歌舞伎の魅力の原点なのだという思いを強くした。

今年のこんぴら歌舞伎には、亡き勘三郎の遺志を受け継ぐ現・勘九郎、七之助の兄弟が出演し、大いに客席を沸かせていたこともまた、うれしいことであった。歌舞伎はこうして、次の時代へとつながっていく。(ささきえり)

チビネコの死

我が家にいる2匹のネコのうちの1匹、シロの息子のチビが、5月2日午前2時半頃に息をひきとりました。2017年4月16日生れですから、ちょうど2年の短い命でした。かっと目を見開いたまま亡くなりました。何か心残りだったのでしょうか？ 硬直した遺体は裏庭に埋葬しました。安らかに眠ってくれることを祈っています。

チビはおそらくよそのノラネコと喧嘩をして、右の上顎をえぐられたのと、下顎もどこか傷を負って血の気がなく、口で噛む力がなくなり、エサを舌で舐めて食べるしかできず、そのうち食が細くなり、体力をだんだんとなくして、骨と皮状態になり、最後は死に至りました。茨城県の条例*1で義務付けられているように、ネコを室内で飼っていれば、こんな事態にはならなかったのかもしれませんが、家の中に閉じこめるのは可哀想な気がして、できませんでした。

*1 茨城県動物の愛護及び管理に関する条例では、「(猫の所有者の遵守事項)第5条の2 猫の所有者は、疾病の予防及び不慮の事故の防止等猫の健康及び安全の保持並びにふん尿の放置の防止等周辺的生活環境の保全のため、その所有する猫の屋内での飼養に努めなければならない」とされている。

結局、私でも背負うことのできるキャリーバッグを購入して、パーキンソン病のこの身体でよたよたと近くの動物病院に徒歩で連れて行って、傷口を縫ってもらい、抗生物質と栄養剤を注射してもらったりしたのですが、その後縫合した糸を自分ではずしてしまい、創傷面が完全にはくっつかないまま、十分な治療ができないまま、逝ってしまいました。

また、食の面でも、特定のメーカーのウェットタイプのエサしか受け付けず、食欲が湧いてこないというか、なかなか食べてくれないので、回復に必要な栄養が足りていなかったのではないかと

思います。もう少し何とかならなかったのかと悔やむことしきりです。特に、体力が落ちている時に、ネコがおいしいと思って、喜んで口にするのできるような、しかも体力の維持につながるような、高カロリーであっても消化にいい食品はないのでしょうか。砂糖はどうなのでしょう？

とにかく分からないことばかりで、忙しいと、図書館の本で調べればいいのかインターネットなのか、どこに頼ればいいのか見当もつきませんでした。

人間の場合、栄養が足りなければ、即点滴ということになるのですが、ネコの場合は点滴では時間がかかりすぎるとのお医者さんの話でした。ネコがじっとしてられないでしょうし、納得です。動物病院で打ってもらった栄養剤は皮下注射だそうで、自然に体内に吸収されるとのことですが、急場しのぎの方法のような気がしました。人間でもそうですが、口からおいしく食べてこそ、栄養になるのではないのでしょうか？

チビが傷を負ってから、途中ふっといなくなって、2日ほど姿を見せないことがありました。これはひょっとすると死に場所を探していなくなったのかと思いましたが、10mくらい離れた隣家の納屋で鳴いているのに気がついて、救出しました。どうも静かなところで邪魔されずゆっくりしたくて、納屋に潜り込んだのだけれど、出口が分からなくなって、助けを求めたような気がします。普段でも、よく生垣の下生えの陰に座っていることがありましたから、落ち着くのでしょう。そのうち、家の中の暗くて静かなところで、たとえば、廊下の隅などで、じっと過ごしていました。

母ネコのシロの場合は、首筋をえぐられるケガを負っても、何とか自分で治してしまったので、少し油断していたところもあったかもしれません。また、かろうじてではありますが食欲があったので、何とか回復するのではないかと期待も含めて思いこんでいたのかもしれませんが。

チビはもともとなかなかの大食いで、1日に4食ぐらいは当たり前だったので、大きくなれば、犬のように散歩に連れていけるかと夢想していたのですが、文字通りの夢となってしまいました。

ネコは独立独歩？

チビはケガの具合が気になって、亡くなる直前はずっと茶の間に寝かせていたので、母ネコのシロは自分の居場所を取られたみたいで、面白くなかったような感じでした。普段なら、家の中で昼寝したりするのですが、なかなか入ってこないで、夜寝る直前に飛び込んできていました。シロにとっては、チビは縄張りへの侵入者とは思ってはいないけれども、自分への愛情をかすめ取る可能性のある存在だったということでしょうか。

先日放送されたNHKのテレビ番組『チコちゃんに叱られる』で、「なぜネコはニャーと鳴くのか」という疑問が出され、正解は「そこに人がいるから」ということでした。

もともとネコは1匹で生きていくものなので、お互いのコミュニケーションのために鳴くということではない。ただ、エサを与えてくれる人と共存するようになって、人に甘えたり世話をしてもらうために、もとは母ネコに甘える時に使っていたニャーという鳴き声を人に使うようになったというのです。特に、母ネコに甘える時の声を使うのは、ネコが幼形成熟（ネオテニー）だからだということです。

つまり、ネコは独立独歩の生き物なのです。シロもチビが元気な頃は時々頭などをなめてはやるけれども、基本的にはお互い干渉はしない。チビの方が体は大きくなっていましたが、シロにシャーと怒られることもよくありました。ただよそ者のネコが縄張りに侵入してくると、共同で威嚇するという感じでした。

ですから、チビがいなくなっからは、全面的に、家族からかまってもらえるので、気持ちがいいのではないかと思います。まあ愛情を独り占めしているということですね。そのせいか、よく鳴きます。シ

ロの場合は、声帯はつぶれているので、ニャーではなく、キーというかすれた声で鳴くのですが。ドアを開けてくれとか、どこにいるのとか、モグラつかまえてきたよとか、鳴いています。特に、何か獲物をつかまえてきた時は、獲物を口にくわえたままで鳴くせいか、少し声が違います。先日も、夜中にヒメネズミをつかまえてきて、家の中に持ち込んで、ひとしきり遊んだあと、丸ごと食べてしまいました。なお、ネズミは食べるのですが、他はモグラは食べませんし、野鳥ももっぱら振り回して遊ぶだけです、トカゲもあまり食べません。

家の中には持ち込まないよう言うのですが、シロが聞き入れてくれるはずもなく、なるべく鳴き声で獲物を持ち込もうとしているのかどうか、判断するよう注意しています。

ところで、話は飛びますが、ネコは独立独歩であるということに関わって、私が印象深く覚えているのが2004年実写映画化された、ハル・ベリー主演の『キャットウーマン』です。アカデミー賞の反対の、その年の最低の映画に与えられるというゴールデンラズベリー賞を作品賞・監督賞・脚本賞・主演女優賞の4部門で受賞しているのですが、そんなにひどいのですかね。主役のキャットウーマンが最後は恋人と別れて一人で生きていくという選択をするところが潔くて格好いいと思って観ていました。ネコは群れないんです。絶対ということはないでしょうが。本物のネコのように自らの道を歩こうとするキャットウーマンは、また、それを演じているハル・ベリーは素敵だと思うのです。まあ設定に難はあるかもしれませんが。

この映画ではエジブシャンマウというエジプト発祥のネコが重要な役割を果たします。エジプトといえば、あのバステト神です。古代エジプトで信仰された数多くの神の中で、ネコの姿をしているのがバステト神です。バステト神は多産と豊穣の象徴です。大食いネコの系列の話で、ネコが登場するのは多産の象徴ではないかという指摘を以前したところですが、まとはずれではなかったのです。（さかべ たけし）

映画「いろとりどりの親子」から、今回はダウン症について触れていきたい。

ジェysonが生まれた時、両親は医師からジェysonがダウン症の為会話や読み書きをすることができないだろうと診断された。しかし両親は諦めずジェysonと関わることで、ダウン症であっても学ぶことはできるということを立証していく。ジェysonは幼少期から「セサミストリート」などのテレビ番組に出演し、本も執筆している。仕事はラジオ局に勤め、友人3人と共同生活を通して家族のような絆を育んでいる。

次に、ダウン症とその家族の様子を3冊の本を通して見てみたい。

まず、『マルコとパパ』（グスティ作・絵／宇野和美訳／偕成社／2018）はイラストレーターである父親グスティが、ダウン症の息子マルコとの日々を綴った作品。グスティは初めのうち、マルコのことを受け入れることができなかったが、母親のアンヌや、長男のテオは「なんの」問題もなく受け入れた。やがてグスティもマルコと過ごす中で、「受け入れる」とは、差し出されたものを自分から喜んで受け入れることだということに気付くようになる。コミカルなタッチの作品で愛情が滲み出ている。

次に、『わたしたちのトビアス』（セシリア＝スベドベリ編／トビアスの兄姉文・絵／山内清子訳／偕成社／1978）は、末っ子として生まれてきたダウン症のトビアスについて、兄姉が見たこと、感じたこと、考えたことをありのままに記したスウェーデンの作品。トビアスが生まれた時、病院から帰って来たママはちっとも嬉しそうではなかった。トビアスは普通の子供にはならず障害児になるのだという。両親は特別な施設に預けようか悩んでいたが、手がかかるならみんなで手伝うのが当たり前だと、子供達は反対する。できないことがあれば助け合うし、違うところがあれば知る方がいい。そうしたらお互いに怖がることはなくなると兄姉は考えたのだ。

3冊目は『ぼくのお姉さん』（丘修三作／かみや

しん絵／偕成社文庫／2002）。小学5年生の正一にはダウン症の姉がいる。宿題で自分の兄弟について作文を書くことになっていたが、正一は友達に姉のことをあまり知られたくはないと思い悩んでいた。そんなある日、姉が福祉作業所で得た初めての給料で家族に食事をご馳走すると言って行きつけの店へみんなで出かけた。姉のひと月分の給料は千円札が3枚。家族にご馳走できることを心底喜んでいる姉と過ごした後、正一は早速原稿用紙に向かい最初の一文を書き始めた。「ぼくのお姉さんは、障害者です。」と。

最後に友達との関わりについて写真と共に綴られた2冊の本を見ていきたい。

『となりのしげちゃん』（星川ひろ子写真・文／小学館／1999）は保育園の3歳児クラスに通うしげちゃんと、年上のあらたちちゃんのお話。ゆっくりと流れるしげちゃんの時間に疑問を持っていたあらたちちゃん。でもそれは病気なのではなく、何でもゆっくり覚えていくこと、感じる心はみんなと一緒だということを知り、2人の距離が縮まっていく。もう1冊『アイちゃんのいる教室』（高倉正樹文・写真／偕成社／2013）は、小学1年生のアイちゃんの学校生活が綴られている。授業に、給食、掃除、遠足、運動会…。先生や友達に囲まれ様々な表情を浮かべ、感情も豊かに日々成長していく様子が窺える。元気いっぱいアイちゃんの口癖は、「あたしもがんばっていいですか。」

『マルコとパパ』の中で父親のグスティはマルコのことを「いいんだ！この子はこのままで！」と受け入れていく。誰もがありのままの存在として受け入れられるという前提に立ち返るまで逡巡しながら。作品を通して出会った主人公たちはそれぞれの時間の流れの中を生きている。それは、誰もが同じように自分のリズムを持っていることと変わらない。家族や友達といった人と人との関わりが、お互いの魅力を引き出し合っていると感じたい。

（かんばん みやこ）

帰ってきた図書館員 (57)

—図書館に生きる—

山下 青葉

このたびの人事異動で、館長職から離れ、図書館ではあるものの、事務職に変わる事となった。カウンターに全く出ないというわけではないけれど、あくまで職員が突然の休暇等で出られなくなった時のピンチヒッターという感じで、たまに電話番号をするというくらいのものである。

利用者の方々と接することができなくなったのは大変残念なのであるが、事務の仕事が案外忙しく余裕がなく、周辺自治体の図書館に勤務していたベテラン職員が職場の指定管理で次々に図書館外の職場に異動を余儀なくされる中、図書館にいられるだけありがたいというところである。

さらに、8年間紙芝居の読み聞かせボランティアを続けていた老人ホームで、音楽を担当していた相方が、くも膜下出血で亡くなるというとんでもない事が起こり、私自身もとてもショックを受けた。老人ホームでも各種リクリエーションの計画をその方中心に進めていたこともあって現場の混乱は大変なもので、紙芝居の読み聞かせも中止に追い込まれてしまい、多分復活することはないのではないかとということとなった。

そんなふうに身の状況が大きく変わった中、たまたまだったのだが、吉井潤氏の『2033年の日本と図書館に向けて』（樹村房 2018年）を読む機会を得た。吉井氏は2015年に『29歳で図書館長になって』（青弓社）を出版され、ちょうどその時私も館長職を拝命し、いろいろと戸惑いもあったことから、吉井氏の方が私よりだいぶ若くはあるのだが、何か参考になる事柄が書かれているのではないかと購入までして読んだのだった。

その時の感想をこの欄に記しているのだが、自分が館長実務をするにはあまり参考にはならなかったけれど、『図書館の発見』（石井敦・前川恒夫著 日本放送協会 新版2006年）の現代版のようで懐かしく、またバランス感覚が感じられてよかったというようなことを書いていた。

それから4年が経過し、私は図書館長ではなくなり、吉井氏もまた図書館総合研究所という民間の図

書館専門のコンサルティング会社の主任研究員になられ、館長職から離れてしまっていた。

タイトルの2033年というのがあえてなぜ?と思われたのだが、これは吉井氏が館長職をされていた図書館にはバブル景気の時期に大量採用された、吉井氏より15歳上くらいの職員が多く、自分の方達と同じ年齢になる時、すなわち15年後の2033年に向けて、自分と同世代の20～40代はこれからどうしていきたくのかを意識することが大切なのでと考えたからということだ。

今回の本でもやはり図書館への提言的なことが主に書かれていたが、図書館のことを知らなくても使ったことがなくても読めるようにとエッセイのような要素も加わっており、最初の章でいきなり、図書館に勤務していた時に朝食に購入していたパールの話をされていたので、何だかエッセイストのようだなとちょっと苦笑してしまった。

吉井氏の著書はこれで3冊読んだことになるのだが、毎回感心していたのは、著書の中で引用されている数値等にきちんと統計的根拠が示されていて、気になるころがあれば本やインターネット等で確認することができるようになっていたところだった。レファレンスを生業とする図書館員としては当たり前といえば当たり前なのだが、推測や感情で物を言うてしまうことは案外多いような気がするのだ。

最終的に吉井氏が言いたかったのは、図書館でということだけでなく、今後の日本をどうしていくか一人ひとりが主体的にならないといけない、特に今の20代から40代が引っ張っていく意識がなくてはこのことだ、これは現在35歳である氏自身にも向けられている言葉であろうと思う。

今度の職場はこの世代の職員が多く、それぞれにとっても仕事を頑張っていて、頼もしく思う日々である。私自身はこの世代からはみ出してしまった者ではあるが、考えるのをやめることなく、少し先輩面をしつつも、彼らと共に歩んでいけたらと思う次第である。(やました あおば：図書館員)

図書館を離れて (第43回)

—戦前の「図書館員」①—

並木 せつ子

第2次世界大戦時に展開された“戦地へ本を送る活動”について調べていたとき、しばしば目の端に入ってきた「図書館員」に関する新聞記事。そのときよけておいた記事から、戦前の図書館員がどのように新聞にとりあげられていたか垣間みたい。戦前の図書館員（とりわけ女性の）についての考察は、既に精緻な論考がいくつもあって今更なのだが、手元にある記事を並べてみただけでも、外側から見た当時の図書館員像がほの見えてくるような気がしたのである。

見出しを原文のまま古い順に並べ、／の後には記事の要約を記した。教習所等名称は種々使用されているが新聞記載のままとした。

1900 (明 33) 年 5 月 官吏の無銭飲食／帝国図書館の目録編纂係田中勝義が、麹町区の銘酒店でラム酒小壘3本 (24 銭) を無銭飲食。

1909 (明 42) 年 8 月 図書館講習の成績／東京市教育会主催の図書館講習が修了。全国から集まった図書館員・官公吏・教員・実業家など 54 名は、各地に戻って簡易図書館、巡回図書館を創設する要件を得るため受講したものである。

1919 (大 8) 年 3 月 婦人に適する図書の整理；東京女子大学で司書科を設置す／実行の日は確定していないが「[司書科設置は] 何れ近い中に実行する…図書の整理などといふ仕事は、女子にとって適当な仕事だらうと思ひます。此頃では東京市内の図書館等でもさうした婦人の必要を感じて居るさうです」と同大の関係者が述べている。しかし「それを職業として立つ婦人を養成する訳でもありません」とも。

1921 (大 10) 年 4 月 図書館員教習所／文部省が設立。修業期間は6月1日から翌3月まで、東京美術学校、帝国図書館に於いて開講する。定員20名～30名、資格は図書館に従業する者、中学校・女学校卒業者。※筆者註：場所は借り物だったものの、この年初めて図書館員を養成する機関ができた。

1921 (大 10) 年 5 月 文部省の図書館員養成；男

女共学で男三十名女が六名／資格は中学校及び高等女学校卒業程度で約40週間教習を受ける。「児童部の仕事があるので女子も特に採用した」とある。

1921 (大 10) 年 6 月 図書館教習開所式／6月1日に上野美術学校講堂で開所式が挙行された。

1921 (大 10) 年 6 月 図書館事業に携る四人の若い婦人；…男女共学で熱心に勉強中／図書館員教習所に学ぶ4人の女性の姓名や経歴が紹介されている。4人のうち園田進子さんの母は「別に是から図書館の方へ務めさせる心算もございませんけれど…」と。また、石川常子さんは大きく顔写真が載っていて「あまり仕事につくお友達もないので極りが悪ひ…」と述べている。

1922 (大 11) 年 2 月 良成績で引張り風の婦人の図書館員；文部省第一回の講習会員卒業…／「[図書館員養成所の第1回生の] 成績良好に鑑み第二回募集に就いても計画を進めてある」という記事。ここでも女性の卒業生だけ全員の姓名が掲載されてる。

1924 (大 13) 年 3 月 図書館員教習所の生徒募集；資格は高女出／25名募集、見出しの入学資格は「高女出」しか記載されておらず女性だけ募集しているかのようだが、本文には「中学校卒」も記載されているので男女共学だとわかる。入学者は試験によらず決定する。

1924 (大 13) 年 5 月 婦人の職業として高尚で収入のよい図書館員；各地の図書館で婦人を求める…／女性のほうが図書館の仕事に向いていて需要も多いので、「文化的職業として…高女出の方に御勧めし度い」と。図書館員を養成するための図書館員教習所は、修業年限1年、入学試験は行わない、と紹介されている。

1925 (大 14) 年 3 月 女図書館員が6名巣立つ；一人は女子大出／第4回卒業生は22名 (女性6名) で、女性だけ6名全員の姓名が掲載されている。うち河野不二子さんは東京女子大学出身で母校の図書館へ勤務の予定。

1926 (大 15) 年 2 月 図書館の婦人司書；新職業として4人巣立つ／第5回卒業生のうち4人は女性。この4人だけ姓名と学歴が掲載されている。主に東京の各図書館で働くという。

(なみき せつこ：元図書館員)